

言語地理学と日本語と

アジア・環太平洋言語史

地理学と



特集 日本語研究

あべ せいや

1 アジアの言語地理学的分布境界線

日本語の基層（のいつ）として、モンソン・アジア領域（図1）（注1）の言語がある可能性を、安部（二〇〇一・八）二〇〇三・七）ABE（2003.7）で指摘した。「モンソン・アジア」（以下MA）は元来は気候学での名称であるが、アジア史研究でも文化人類学研究でもまだほとんど知られていない領域である。

この領域は、執筆者が日本語の河川地形名の分布を取り上げ、国内方言の「方言地理学」的解釈、及び、河川地形名の近隣言語を含めての「言語地理学」的研究から、その背後にMAという気候の影響があることを見出し指

摘するに至ったものである。モンソン（以下M）が影響するアジア・太平洋の広い範囲では、河川地形名及び類別詞という言語現象のほか、気候・植物・動物・主食作物・農耕技術・食物保存加工技術（発酵）・道具加工技術（旧石器）等が一定の共通する領域（ないしその周囲とは異なる領域）を形成している（個々の分布は安部（二〇〇三・七）や安部HP参照）。

その共通現象の多さは世界的規模で見ても特異であり、先行する指摘も世界的に見られないので、文化人類学的重要性を込めて「モンソン・アジア文化圏」と名付けた。また、その大陸側内部にはほぼ共通（近接）した位置に分布境界線（帯）が引けるので、それを動植物

境界線「津軽海峡―ブラキストン線」「七島灘―渡瀬線」等に準えて(安部二〇〇一・一一)「Monsoon Asia-ABE-Line」を名付け(安部二〇〇四・七)分布境界の目安とした。これらは(「MA中央気候線」も含め)言わば「地理学(文化地理学)」(注2)的研究としての名付けでもある。

本稿はそのような研究の一環として、①MA文化圏の諸特徴と言語との関係、②MAにおける現象の追加、③河川地形名(サワの継続)について考察を加えていきたい。特集テーマが「地理学」でもあるので、基本的には執筆者の「言語地理学」的研究から論じ起こしているものの、本稿では個々の言語現象よりも、文化地理学的観点からMAの分布とその特質に関する理論的考察に、与えられた紙幅が消化されたことをお断りしておく。

2 MA文化圏の諸特徴と言語との関係

MAの諸特徴は、基本的に気候の影響によって直接的間接的に形成されたものと考えられる。いま問題を言語学に限定して言えば、MAの諸特徴と言語そのものとはどのようなに関わり得るか否かを、今後の文化人類学的な検討とは別に、言語学的に検討していく必要がある。気候・動植物・道具・技術・食物・文化ほかが共通した時

に、言語がどのようにこれらの影響を受けるか否かは、重要な言語学的課題である。

気候が共通し主食作物や動植物が同じ地域では、移動を含む狩猟栽培など人間の生活がその地域内で安定して行われ、食生活や習俗等の共通性が高くなり、広い意味で同じ文化を共有しやすくなる。同じ文化を共有している地域ほど、言語上の共通性も長期的に見て生じやすくなることは、バルカン半島の言語連合などの具体的言語史的事例によって既に指摘されており、言語学的に起こり得ることがわかっている。そのような地域では語彙は(人的移動や言語伝播が証明できる範囲において)かなり広く分布することも起こり得る(東アジアの馬語彙など)。問題は特に文法や音声現象であろう(音声は安部二〇〇四・七・一〇参照)。ここではやや「将来」の研究のために、文法と、MA領域の特徴の一つ「打製石器」との関連性について、一つの理論的な仮説を素描し残しておきたい。

旧石器時代の打製石器はインドの西部を境界に東西世界で大きく異なる(図は安部二〇〇三・七参照)。この境界線は旧石器研究上「Movius line」と呼ばれる境界線である(ルーウィン二〇〇二)。日本の考古学研究書からはまだ名前を見出していないが、モビウス線は文化人類学上「モンソン・アジア―安部―境界線」に含まれると位置付けられること

特集 語りのテキスト

図1 モンスーン・アジア気候のアジア・環太平洋の領域 (安部 2004・12)

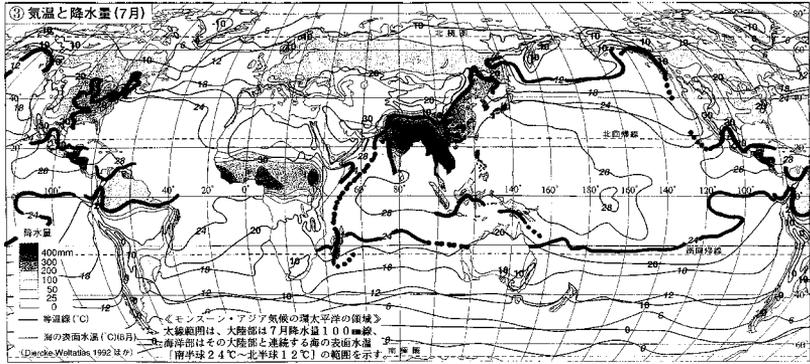
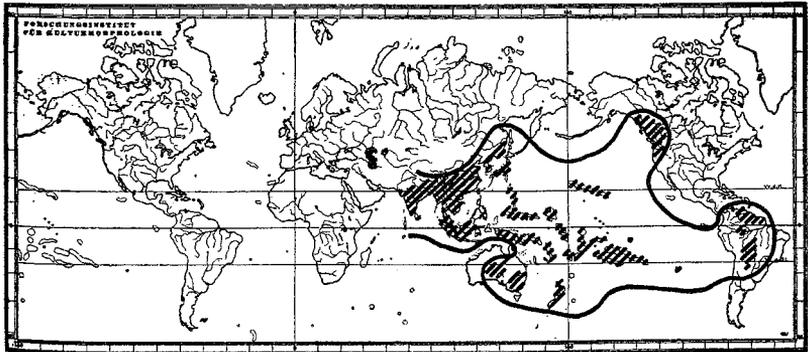
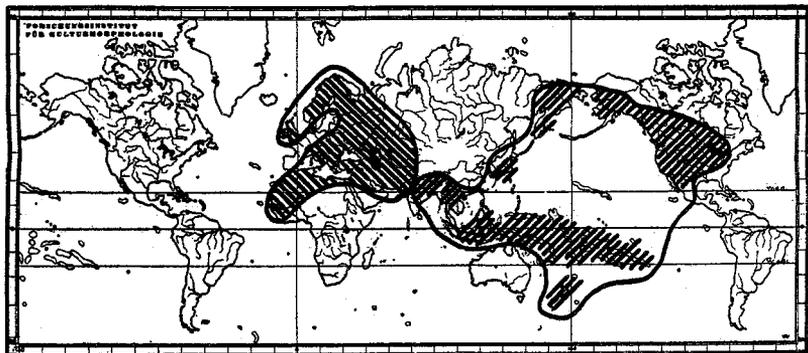


図3 花からの誕生の神話分布 (Frobenius 1938)



6. Blütenursprung

図4 焼鉄(西)と焼石(東)の神話分布 (Frobenius 1938)

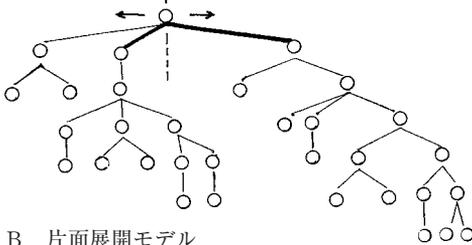


20. ||| Polyphentod

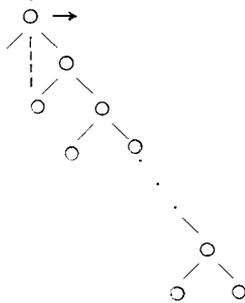
/// Glutsteintod

図2 両面展開の概念モデルと片面展開の概念モデル

A 両面展開モデル



B 片面展開モデル



になる)。この境界線の西側は両面加工石器、東側は非両面加工石器（チョッピング・ツール）という相違がある。この二分割は概括的分類であり、両面加工の過程にも「正+反」加工と交互加工があり（竹岡一九九一）、また、両面・非両面（・片面）という分類を厳密に再確認する必要はあるが、以下での議論には影響ないので、これを両面と片面と単純化させて話を進める。

石器の加工は、道具の作製法であると同時に立体空間や手順の把握・構成方法でもある。道具や空間の構成法

は、抽象的配列構成・思考の記号化や、さらに、記号化の延長としての言語の発達と密接に関連することが推定できる。つまり、言語の構成法即ち文法の獲得過程に何らかの関連性・相関性を、残し得ることが、理論的に導き出せる。

論を抽象化させてさらに進め、石器加工と文法とを極端に記号化して対比して見ると、両面加工の特に相互加工の構成法は、左右対称型に下位概念を細分化していく構成法であるが、それに対して、片面加工は一方向下位展開の構成法というプロセスを有する。いま、その構成法の類型を、構文における類似パターンに探し求めてみよう。例えば、前者の類型として、文法の句構造分析における左右両方向展開の樹系図が指摘でき、後者の類型としてはその片側一方向展開（例えば繰り返し埋め込み構造）に見出せる（図2）。

石器加工手順と文法とを比較するのは突拍子もない発想と思われるかもしれない。しかし、我々は、言語（・文化）の相違による発想法や手順、言語表現の構成法・プログラミング等の相違を日々感じることができる。西側の両面加工石器はほぼ印欧語及びその周辺言語領域と重なり、非両

特集 語りのテキスト

面加工はほぼMA領域と重なる。さらに後述のように、神話にもこの石器の東西分布に似た、東西の対照的分布パターンが見出せる(図4)。複雑な文構造はいくらでもあるので単純な一構文とのみ比較するわけにはいかないのはもちろんである。また、東西言語を特徴付ける典型的句構造が、大局的にこの石器加工パターンと果たして一致する類型を示すかどうかの検討はこれからの課題である。一方、石器作製の変遷と、脳や思考の発達・言語獲得との関係に関する研究は考古学では既に始まっている。石器加工法の類型的地理学的分布パターンと言語分布との相似は、将来の言語研究にとって留意しておくべき特徴である(なお、石器作製法と「記号化」との関連性に関しては竹岡俊樹(一九九二)を参考にしたが、句構造との対比は安部の試論である(注3))。

MAに分布する諸現象の、何がどのように言語の文法・音声・語彙に影響したか。先入観や偏見なしにこれから取り組まなければならない研究課題であると考え

3 MA文化圏における共通分布現象

MA文化圏と、共通ないし類似する分布領域をもつ他

の現象を追加しておく(①~⑫は安部二〇〇三・三七参照)。

⑬東洋における神話の類型的分布領域 全10葉(フロベニウス一九三八 図3「花からの誕生」図4「焼鉄(西)と焼石(東)」。安部二〇〇四・五・二台湾、安部二〇〇四・七・二韓国発表)。

⑭MA海域におけるタカラガイ類の分布領域(図5は「キイロタカラガイ」の分布。海温と海流の関係による。白井祥平(一九九七)『貝Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』より)。

◎参考地図「霊長類の類似ウイルスの地理的分布」(図6)

⑬は、言語を媒介とする現象として神話の分布を探索して、後藤明(二〇〇二)『南島の神話』中公文庫掲載からようやくたどりついたものである。図3のようにMA領域と類似した範囲を示すだけでなく、一方のほぼ西欧側(印欧語族とその周囲)に対照的な神話分布領域をもつ(図4)。それら西洋神話と東洋神話との対照的分布は、印欧語の範囲とMAの言語領域(特に類別詞)、両面加工石器(いまアフリカを除く)と非両面加工石器の二局的分布とも、大局的に類似する点は注目される。フロベニウスの所謂太陽神話論は、データも解釈も古い段階のもので、収集神話の漏れが(当然ながら)指摘され(大林太良一九七五・一九九九)、また彼の類型化や文化圏の考え方には現在の水準から見て問題が少なくないという

図5 キイロダカラカイの分布図 (白井祥平 1997)

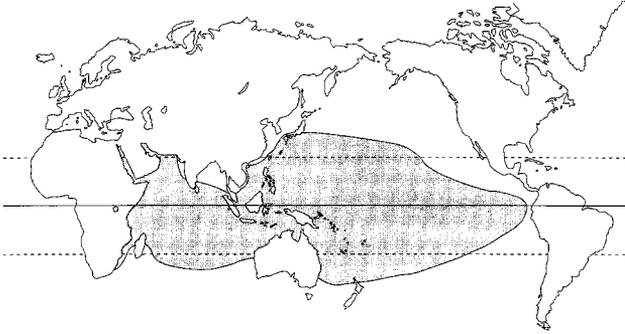


図6 霊長類の類似ウィルスの地理的分布 (日沼頼夫 1993)

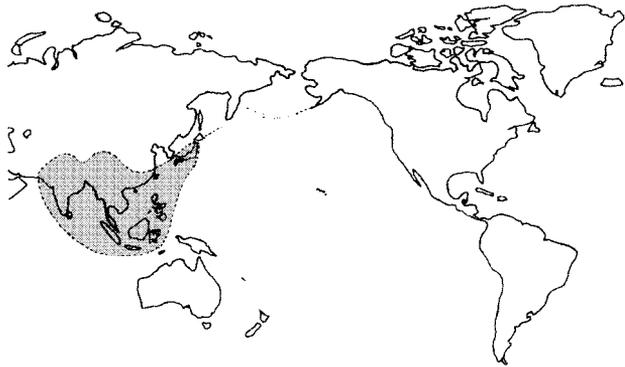
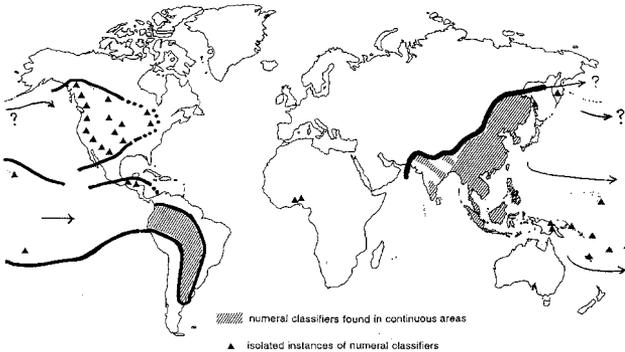


図7 類別詞の分布 (Aikhenvald 2000)



(学習院大学吉田敦彦教授(神話学)のご教授を戴く(注4))。大林(一九九九)も同様にそのような問題を指摘するが、一方、東西二つの対照的領域という点に関しては「大勢として東西両群の存在は疑うことができない」と認めている。

神話分布になぜ二地域的類型があり、なぜ言語分布のバタンに類似するのは今後の課題であるが、その地理的類似は、少なくとも東世界のアジア・環太平洋の神話分布形成がM A文化圏と関わる蓋然性が極めて高いことを示す。神話分布も、「ことば」を媒介としたそれ相応

特集 語りのテキスト

の古さが推定できる「M A型分布」をなす文化的特徴と位置付けられる。

4 M A気候の範囲——Mアジア・環太平洋

ここではM A領域の再検討について簡略に記しておくたい。

3節で見た神話分布は、アジア・太平洋ではこれまで示してきたM Aの領域とほぼ重なるが、東側は南北アメリカ大陸の西岸まで及んでおり、これまでMの影響範囲と見てきた領域より広い点が問題となる。一方、類別詞の分布(図7)は、南北アメリカに及び、むしろ東の神話分布とほぼ重なっている現象であることが今回初めて明らかとなった。これら南北アメリカでの分布はどのように解釈されるであろうか。

結論として言えば、M Aのアジア沿岸部とはほぼ同じ気候環境(季節風・気温・海水温・海流)が、北アメリカ西海岸及び中米・南アメリカ北部と認められる。さらに、この東西の間に、季節風・海流による動植物の移動関係(さらに過去の人的移動)が認められるから、M Aと北・中アメリカ西海岸側(わかりやすく少し広げて言えば環太平洋沿岸部)とは連続するM気候と解釈できる。そして、

アジア側に共通する現象の多さからみて、南北アメリカ側はアジア側の諸特徴の一部が、後代拡大した範囲であると解釈できる。

説明を補う。安部(二〇〇〇・一二)等で、気候学の研究からMの地球規模での領域を探った。アジア大陸の情報は得られても、都市や農耕の情報の必要性から遠い海洋上のM気候の範囲となると、ほとんどデータが得られなくなる。そこで、海洋上の範囲は、アジアのMの領域(これは高等学校社会科地図でも境界線の掲載がある)の沿岸部とほぼ同様の環境、つまり七月降水量(水が特に少なくなる夏季)・気温・海水温、そして季節風(台風・サイクロンを含む)等から推定したものであった(図略。使用地図は図1に同じ。安部(二〇〇〇・一二)の発表が最初の提示)。その太平洋の範囲はほぼオーストロネシア語ANの範囲とも重なっていたから、設定した海洋上の気候条件はおおよそ均質な範囲として妥当なものと考えられた(おそらく偶然ではなく必然的一致であろう。図5も参照)。

その線引きの際、実は疑問の地域を残した。同じ気候条件が該当するカナダ沿岸部、中米及び南米の沿岸である(図1参照)。当初これらの地域を考慮範囲外としたのは、Mはアジアの現象という先入観があったためである。しかし、その後見出した類別詞の分布は、果たしてそ

の南北アメリカに及んでおり、特に南米での分布は太平洋の分布から伝播し拡大したように見える。北米は、散在する分布であるが先住民言語であり、また、ベーリング海峡はかつてベーリンジアと呼ばれる陸橋でアジアと連続し、西からの移動があった。また、過去の世界的温暖期にMの範囲は北半球（沿海州と北米）で多少拡大していたことが推定できる。南では南太平洋諸島と中南米付近との間の海流・季節風による往来も推定されている。

言語現象とそれ以外の現象とは慎重に区別して検討する必要があるが、アジアという先入観から離れ、MAの領域設定の基礎となった気候のみで見れば、上記範囲はMAと連続する領域と認められる（興味深いことに、中・北米のMA気候のこの位置は、アメリカ大陸でも言語密集地域という共通性をもつ（注5））。

MA文化圏のいくつかの現象がやがて環太平洋沿岸部に拡大したものが、一方では類別詞の分布となり、また一方では東洋神話の分布となった可能性がここに指摘できる。今後、言語の研究においても、旧稿のMA領域だけでなく、ここに示したアジア・環太平洋沿岸部の言語分布との関連も考察していく必要があることになる。

5 サワ（沢）とオーストロネシア語研究

[1] サワ沢と日本語の同源地名

MAの言語史を研究するのに河川・水源地形名の有効性を指摘し、これまで日本語のナイ川（安部二〇〇一・八、二〇〇四・七）・サワ沢（安部二〇〇四・七）・ヌマ沼（安部二〇〇四・七・一〇）を取り上げてきた注6）。ここでは、サワの言語地図のみ掲載した安部（二〇〇四・七）（以下、前稿とする）のAN語形を提示し、先行研究と比較したい。前稿では、サハ（√サワ）、さらに氷の意味の東北方言シガ・スガの三語形に、日本語史・方言史による解釈を加えた内的再構成によって、同源語形として「理論的に再構成し得る推定語形」及び祖語形PJNを次のように導いた（紙幅の関係で割愛した異形態（下線）を追加）。

祖語形 Proto-Japanese (PJN) *sajwa (第2候補

*suɲwa)

sawa 'saɸa 'sapa 'suga 'siga; *saka ' *sakwa '
 *saba ' *saga ' *sagwa ' *saja ' *sajwa 'suga 'siga '
 suɲa 'siga 'suga 'sija ' *suɲwa ' *siɲwa ' *sukwa '
 *suka ' *sikwa ' *suba ' *supa ' *sugwa ' *supa '
 suwa ' *samba ' *sumba ' *simba ' etc.

」の中のsuwaから実在地名「諏訪」を同源と推定し

特集 語りのテキスト

た。その後、同じく推定語形に該当する次の地名も同源と解釈できる(注7)。

suwa 諏訪, sirja 滋賀, suga (→ suga・u > suga・pu) 須郷・菅生

実在の地名が確認できることは、水の意のシガ・スガを考慮したことと内的再構法との妥当性を補強する。さらに、これらの語形から同源として次節のオーストロネシア語 AN(ニアヌ語 an)の河川名を導くことができる。

[2] オーストロネシア語の *sunjay ‘川’

前稿で、ANの川を表す語群から[1]の推定語形と類似する語形として、言語地図(図8)に示した言語は次の通りである(次の大文字三文字は言語名の略記号)。

- ① *AKL suba? : AKLANON'
- *PAL sapa? : PALAWAN
- *KAG súbá? : KAGAYANEN'
- SAB sowan : BANGINGI SAMA
- ② *MUR sunjy : MURUT (TIMUGON)
- *BAT sunje : BATAK TOBA
- *MIN sunjay : MINANGKABAU
- *IND sunjai : INDONESIAN
- MAD sunjay : MADURESE

③ *RTU sftu : ROTUMAN (ポリネシア語派に属す。①②との関連未詳)

略称 PWP : Proto-Western-Marayo-Polynesian

PHN : Proto-Hesperonesian

PAN : Proto-Austronesian

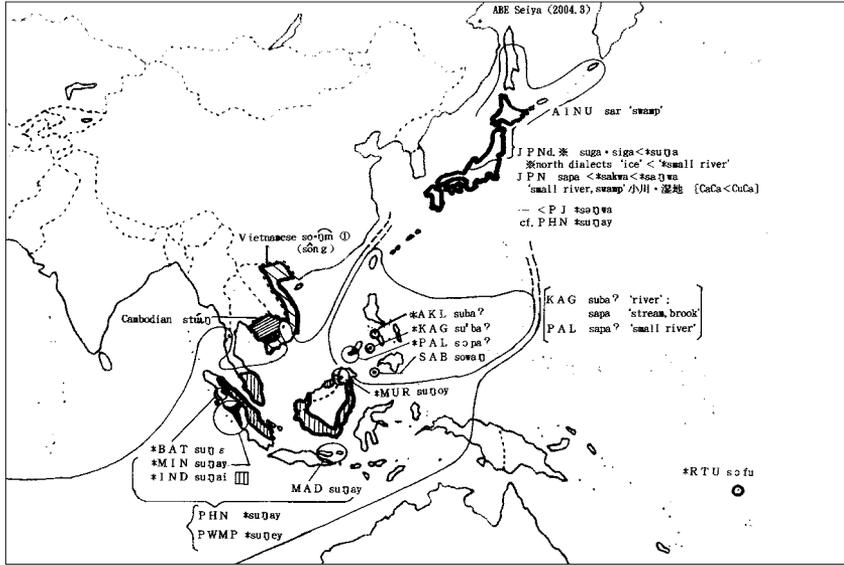
二音節目が、①は両唇音p・bのヘスペロネシア語派北方語群、②はHNのそれ以外のり形、③はf形なので参考まで挙げたがポリネシア語派の言語である(母音はu・o・c)。

①で推定祖語形として掲がっている三言語は、補注部分には次の語形が挙っており、意味も 'small river', 'water flow', 'stream', 'brook' など多少広いことがわかる。

① AKL Proto-Southern Philippines *suba? 'stream',
PAL sapa? 'small river', sapa? 'stream',
brook',
KAG suba? 'river', sapa 'stream', brook',
CAD (一九九五) の祖語形一覧には、ヘスペロネシア祖語形 PHN と同じ *sunjay が挙げられている。また、語形一覧の MGY (Malagasy Merina) の補注には、

西ヘスペロネシア祖語形 PWP と同じ *sunjey も挙げられている。いずれでもり形が推定されているので、祖語形と同じり形の②群が古く、北方の①群は語形と

MAP8 Distribution of *səŋwa~*suŋay as 'small river' 小川 in Monsoon Asia (ABE Seiya 2004.3)



その位置から判断して、*ŋ*形から変化した新語形と推定される。つまり、①②の全語形がANの少なくともPHN *suŋay に溯る同源語彙と解釈される。

①②は、まずPJNの上記推定語形に似ているものを選び出したものであるが、この検討によって、偶然の類似語形ではなく、同語源と解釈できる一群であると位置付けられることになる。特に①の北方語群では第二音節*p*ないし*b*で、日本語サハの古形*sapa*（ないし**saba*）とほぼ同じであり、また、南フィリピン諸語PS PH *suba? とKAG suba? も、スハ諏訪へ*supa* *suba とほぼ同形と見なせることは注目される。また、理論的に推定した水の意の方言スガ・シガも、予想外であったであろうが、むしろこちらの方がPHN suŋay に近似している結果となった（国内地名でもスハ諏訪、シガ滋賀、スガフ須郷・菅生が追加でき、その推定の妥当性とそれらの古さを裏付けた）。日本語サハの同源として、PHNが少なくとも現在最も蓋然性が高いと考える（注8）。

[3] これまでのサワの比較言語学的研究

これまでサハの語源はどのように解釈されてきたのであろうか。遺憾ながら先行研究を網羅するには至っていないのであるが、ここでは、奥里将建、泉井久之助、川

特集 語りのテキスト

本崇雄、村山七郎の説を確認しておきたい。

サハは古くは、奥里将建（一九四三）に、マライ語 *sawah*）水田と比較されている（いま村山七郎（一九七五）による）。

ANの専門家である泉井久之助（一九五三）も、マライポリネシアのtと日本語sの対応として水田の語形を挙げ同源と見ている。奥里を受けるものであろう。

OMP. *t. - H. s. (略) **t'abah* 《水を張った稲田》、
水田「沢」: *ML. Ja. sawah* 《水田》、*B. saba* 《水田》、
D. mān'awan-an 《とり入れをする》、等。一日、
サハ・**sapa* (沢、「倭名抄」・「佐波」)

ANとアルタイ語の重層説を唱えた川本崇雄（一九九三）はPHNの**sabaŋ* 流れ口を挙げる。

○(前略) *Phn *sabaŋ* 流れ口 > *WBM sawaŋ* (小川が) 大川に流れ込む、*Png sabaŋ* 河口、*Mar sabaŋ*、*Ilk sabaŋ-an* 河口(後略)

河口にあたる単語は未確認であるが、水田とも関わるものか。

サハの同源としてフィリピン語の *sapa?* を挙げている点で村山七郎（一九七八）は注目される。泉井（一九五二）の説を挙げたあと、サハの祖形を挙げる。

○サハの祖形は**nt'aban* のはず（「引用者注：泉井

の挙げるMP・原始インドネシア語の**t'aban* ならば、日本語でタハとしてあらわれるはずです。タガログ語その他のフィリピン語 *sapa?* 「流れ」）（引用者注：更に**ban* 「洪水」と分析する）。

この前後はやや文脈が込み入っているので簡略に記すが、村山はサハ（前後のMPの水田なども含め）の祖形を**t'aban* ととり、*sapa?* も同源の例として挙げていようである。フィリピン諸語を同源と指摘した説は、現在管見の限りでは村山のみである。但し村山は、祖形と記して挙げた語形も、*ban* (洪水) と前部分に分析できるといふラッベルトンの説を支持している。[2]で見たいHNの川そのものを指す語群は考慮されておらず、またCADの祖語形**suŋay*とも異なる。CADでは二つの形態素には分析していかない。

以上、日本語の系統論研究上重要視されてきたANでの、これまでのサハの探求状況を報告した。拙論は、先行研究の確認が未だ不十分ではあるが、現在のところANとの同源性について考証を試みた、最も新しくかつ蓋然性の低くない説と考える。言語学関係者のご批判とご教授を切に願うものである。

6 「言語地理学」と「文化地理学」の提携

紙幅が尽きたが、仮にANのr形とp・b形とが異なる段階の語形であり、しかも、日本語での同じ二群の語形（サハとスワ・シガ・スガなど）が日本内部での派生でなくANからの拡大による語形であった場合、日本語にはANからの前後二回の伝播があったことになる。

「言語地理学」的研究は、日本語史研究にとっても、今回その拡大領域と捉えた環太平洋沿岸を含むMAの基礎語彙並びに文法現象の言語史的研究にとっても、有効な研究方法の一つである。また今回、MAの領域を再検討する過程で、神話分布領域と類別詞との対照があった。「文化地理学」的研究も、今後の「モンスーン・アジア環太平洋」領域の言語史研究にとって重要と考える。

注

- 1 従来ほぼ図1の南北アメリカを含まない範囲を提示してきたが、本稿でこの範囲に拡大させ、モンスーン・アジア環太平洋領域と見る。
- 2 文化地理学は「①人文地理学の一つ。経済地理学、政治地理学などと並んで、民俗・宗教・言語などの地域的分布や特質を主な研究内容とするもの。『日本国語大辞典第2版』」
- 3 日本語での指摘としてはこれで十分と考えるが、これが英語に直訳されると表現が婉曲に過ぎるので書き直しておく。

「石器作製法と記号・空間の構成法の相関性を考え、さらに、旧石器の東西二地域と、印欧語領域・MA領域の東西二地域との地域的類似（重なり）を照らし併せて考えると、その地域的一致には単なる偶然性というよりは何らかの相関性を認めることができる（アフリカの解釈は別に可能）。それゆえ、石器作製法の相違が、大局の意味での文法（構文）の東西差形成に影響した可能性がここに指摘できる。仮にそのような要因によるものなら、モビウス線以東に人類が移動して以降の石器作製法の変化が、その領域での自然環境に併せて変化した結果と現在推定されている（ルーウィン 二〇〇二）ことから極論すれば、文法の東西での相違も河川地形名同様に、気候（自然環境）の影響を（間接的に）受けた結果であると言える。安部」

4 吉田敦彦先生には、フロベニウスとパウマン、世界的神話研究や文献についてご教授を請いご蔵書も拝借した。また、吉田先生の御高弟・平藤喜久子氏（明星大学非常勤講師・博士）にも、論文や蔵書を含めご教授いただいた。フロベニウスの地図をMA文化圏に含める解釈は安部の責任に帰するものであるが、両氏に厚く御礼申し上げます。

5 これらに加え、東アジア極東沿海州、中国雲南省近辺、パプア・ニューギニア近辺など、MAの周辺領域に、言語密集地域が、あたかもMAの周囲的言語特徴を示すように分布し、MAの言語形成過程に関わるように見える点は注目される。

6 ナイの諸言語語形について、安部（二〇〇三・七）の地図8では補助記号が校正の過程で脱落しているので補訂した。Tungus na（安部 二〇〇一・一一）とは正し。Santa li nái, Sávvara ngýri, Kurumba nírú, Gilyak náyru 小川, nálio 小江, Naid（神名）、nadi（Sk）を含め、解説は機会を改めらる。

特集 語りのテキスト

7 諏訪は鏡味完二(一九五八)を見出した。これらの先行研究と解説は機会を改める。

8 東南アジアの大陸側の言語では、ベトナム語 *song* [so:ŋm] ①「カンボジア語 *stung*、ブルネ語 *kyong* [chaun:]」が同源の可能性があり、沿海州の言語なども含め現在継続調査中である。

参考文献(抄録。関連文献や地図は拙論や <http://pagefreer.com/abeseiya/>参照)

ABE, Seiya (2003.7.29) Dialectical/climatic features and distribution of terms for watercourses in Asian languages: the case of Japanese, Korean, and Chinese. 'Proceedings of XII International Congress of Linguists' in CD-ROM, Prague, CL17.

Probenius, Leo (1938) *Das Archiv für Folkloristik, Pulaenna 1.*

あべせいや(一九九七)『日本語のルーツをさぐったら……』(アリス館)

安部清哉(二〇〇一・八)「東アジア(日本語・韓国語・中国語)の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」(『韓国日本學會(KAJA)第63回學術大會 Proceedings』)

安部清哉(二〇〇一・一)「東アジア(日本語・韓国語・中国語)の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関 配布地図・補論」(『玉藻』37)

安部清哉(二〇〇三・七)「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」(『国語学』54巻3号)

安部清哉(二〇〇四・七・一〇)「日本語の境界とモンソン・アジアという世界——水源地形名 *nuna* へ *kumb* (沼・泥)の言語分布——」(『韓国日本学連合会第2回国際學術大会 Proceedings』)

安部清哉(二〇〇四・七)「地名と日本語」(『国文学解釈と鑑賞』69巻7号)

泉井久之助(一九五三)(一九五二?)『民族学研究』17巻2号(いま泉井(一九八五)による)

泉井久之助(一九八五)「日本語と南島諸語——系譜関係か、寄与の関係か——」(『日本語の系統・基本論文集1』(和泉書院))

大林太良(一九七五)『神話と神話学』(大和書房)

大林太良(一九九九)『銀河の道 虹の架け橋』(小学館)

奥里将建(一九四三)『古代語新論』(三省堂、四八五頁と村山(一九七五)に引かれる。)

川本崇雄(一九九三)「日本語・オーストロネシア語比較語彙表(4)」(『英語英文学研究』32、創価大学英语英文学会。かつて、この御論文を含む多くの御高文をお送り戴きANについて御教授を忝くした時期があった。学恩に感謝いたします。)

竹岡俊樹(一九九一)「旧石器時代の石器分析からみた左右差の起源と発展」(『左右差の起源と脳』朝倉出版)

村山七郎(一九七五)『国語学の限界』(弘文堂)

村山七郎(一九七八)『日本語系統の探求』(大修館書店)

付記

本稿は平成15—17年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)(課題番号15520298、代表者・安部)による研究成果である。

(安部清哉 学習院大学文学部教授)